

Reborn

The First Part





危ない!!!

ジョー!!



どうだ

ジョー

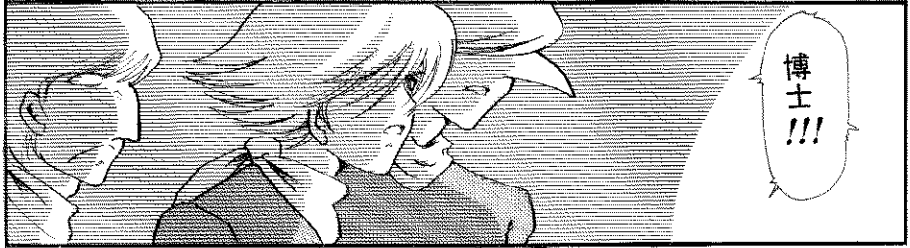
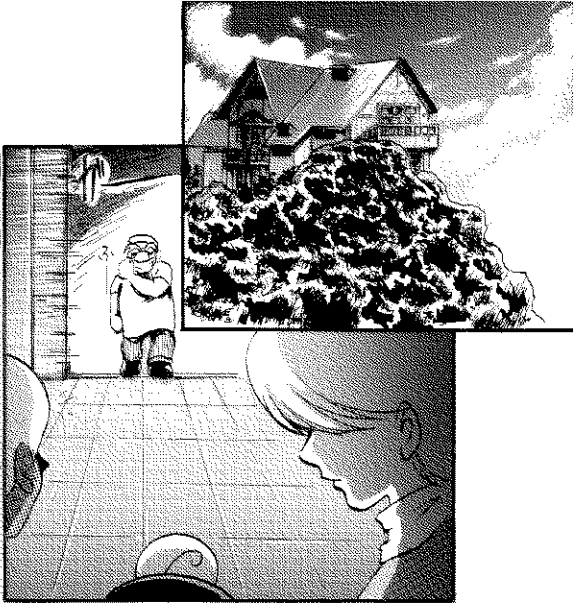
細菌兵器は
全て燃やしたぞ

今回は

早く片が付いたな

よし
引き上げよう





フランソワーズが顔を上げた。

重苦しかった空気が一気に緩み、仲間たちが彼女の元へと歩み寄るのを、ジョーは別世界にいるような気持ちでただ見つめていた。

「よかったな」

「たいしたことなくて何よりだ」

「ありがとう。もう大丈夫よ」

「傷痕ひとつないぜ、さすが博士だ」

「つていうか、前よりよっぽど良くねえか？」

「何てこと言うのよ！」

仲間たちが口々にフランソワーズに言葉をかけ、彼女は笑顔でそれに応える。

包帯を外したその顔は以前と寸分違わない。皮膚の継ぎ目すらないに等しい手術は神業のようだった。

まるで何事もなかったかのように……。

（いや、それは違う！）

安易に安堵しそうになつた自分に、心のどこかで警鐘が鳴り響く。気づくと彼女が不安そうにジョーを見つめていた。

「……フランソワーズ、ごめ……」

「言わないで。油断したのは私よ。それにもう治ったわ」

「……よかった、キレイに治って」

「博士のおかげだわ」

そう言つて、彼女は嬉しそうに微笑んだ。

「それくらいにして、フランソワーズを休ませてやりなさい。手術後じゃから安静にしないといかん」

博士の言葉に仲間がひとり、またひとり、とメンテナンスルームを出て行く。ジョーもゆつくりとドアを出た。背中に視線を感じたが、彼は振り返らなかつた。

アルベルトが最後に残つた。

「ゆつくり休むんだな。欲しいものがあつたら……」

「……ありがとう、特にないわ」

「そうか……」

フランソワーズはふつと扉から視線を外し、顔を伏せた。アルベルトとは目を合わせようとしなない。彼は労わるようにそつと彼女の肩を叩き、部屋を出た。

（全く、とんだ役目違いだ……アイツ、逃げたな）

リビングに入ると、甘ったるいミルクティーの香りが鼻についた。グレートが英国風のテイータイムを気取っているのだろうと、多少苦々しく思いながら、アルベルトはソファに座つた。彼の気配に、正面に座っていたジョーが顔を上げた。

（部屋に逃げ帰らないだけマシか……）

ジョーはギルモア博士に、彼女の怪我についてあれこれと尋ねていたらしかった。他のメンバーは口を挟むことなく、二人の話に耳を傾けているようだ。

博士はお茶を飲み終えると、話を打ち切つて立ち上が

つた。大きく伸びをして息をつき、首を曲げ、拳で自分の肩をトントンと叩いた。

「博士、お疲れ様でした」

「うむ。フランソワーズのことは心配要らんよ。脳にダメージがなくて幸運だった」

博士が立ち去つたのを合図するように、メンバー達もソファから立ち上がった。

「じゃあな、お先に」

ジェットがおどけた調子でジョーの頭を小突く。

「中国に古くから伝わる疲労回復のツボね」

張大人が、突然音中のどこかを押すか何かしたらしく、ジョーは口に含んだお茶を、変な所に吸い込みそうになつてむせた。

「我輩のスペシャルミルクティーはぐつすり眠れるぞ」

グレートは、空になりかけたジョーのカップに、なみなみと紅茶とミルクを注いだ。

「明日はドルフィンズの整備だね。寝坊するなよ、ジョー」

「おやすみ、ジョー」

ビュンマとジェロニモが去ると、リビングには寒く感じられるほどの静けさが満ちた。

ジョーは深くため息をついた。長い前髪に隠れて、その表情は窺い知ることができない。

「なあ、ジョー、なんで……」

「……」

突然の問いかけに、ビクッと驚いたようにジョーが顔を上げる。アルベルトが残っていることに気づいてなかつたらしい。

「……なんで彼女の傍にいてやらない？」

「え、安静だつて言うから……」

違うだろうと喉元まで出掛かり、アルベルトはそれを抑えた。これ以上は余計な世話でしかない。寂しげなフランソワーズの姿を思い出すと可哀想だったが、仕方があるまい。

ジョーはアルベルトをじつと見つめていた。しようがないヤツだと思いつつながら、アルベルトは不味いミルクティーを飲み干して立ち上がる。

「悪いがお前の期待には応えられないな。みんなもそうだったろうが」

それ以上、ジョーの顔を見ないようにして、アルベルトは足早にリビングを去つた。背後でカップをテーブルに乱暴に置く音が聞こえた。

（誰かに責めて欲しいなんて甘えは捨てろよ、ジョー）

いつ誰がどうなるか分からないミッシェン中のことを、責められはしない。誰もが今回のジョーやフランソワーズの立場になる可能性は常にあった。彼女が無事であることを何より喜ぶべきで、ミッシェン時の事は全てそういうものだと思えるしかない。

（だからお前は優しすぎるのが欠点だと……）

それがジョーの最大の欠点である以上に、最高の長所であり、仲間の救いともなっていることも、アルベルトはよく知っていた。だからこそ彼女もジョーに想いを寄せ、心を預けているのだろう。

アルベルトの最後の台詞はジョーの胸に突き刺さる。

(そうか、さすがだな……)

ジョーは今更ながら、誰かに罵られ、叱り飛ばされることを望んでいた自分に気づいた。彼女が元通りに治った姿を見たところで、混乱した気持ちは簡単にはおさまってくれない。

テーブルの上のティースプーンを無意識に弄ぶジョーの顔に、苦々しげで冷めた笑みが浮かぶ。

今回のミッションは、化学兵器や細菌兵器を開発している某国の工場を潰すのが主目的だった。B.Gの息がかかっていたために、彼らの出動となったのである。

製造ラインは爆破し、実験室や研究室は炎で焼き尽くし、研究データは全て破壊した。予想よりスムーズにミッションが終わった——と思つた矢先に、フランソワーズが負傷した。

(何がいけなかった……いや、全ては僕の油断だ……)

咄嗟のことに加速すらできなかった。レーザーが彼女を焼く音が聞こえた。その光景は脳裏に焼き付けられ、繰り返し脳内で再生されてはジョーを苛む。

(なぜ僕を庇ったりなんかしたんだ!?)

それが見当違いな責任転嫁であることは、ジョーにも分かつているが、自分が当たっていればよかったのにと思わずにはいられない。

(無事で良かった。もし、脳に致命的なダメージを残していたら……)

ゾクリと悪寒が走り、ジョーは両手をぎゅつと握り締めて腿を叩いた。想像しただけで鳥肌が立つ。方が一にも彼女を——他の誰でも——失うわけにはいかない。

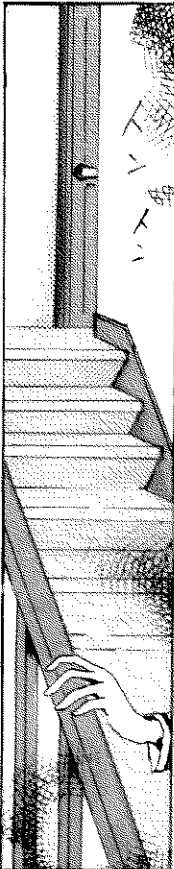
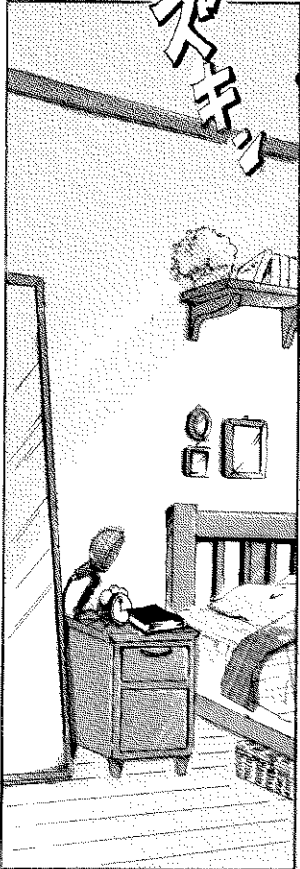
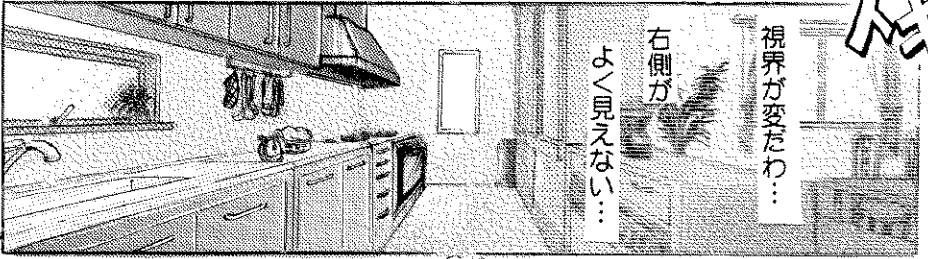
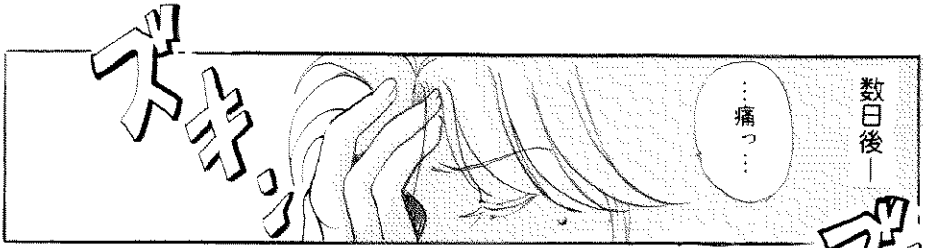
フランソワーズの手術は短時間で無事に終了した。人工皮膚移植と人工眼球周りのパーツ交換なので手術自体に困難はない。検査の結果、脳や神経系へのダメージはないことが分かり、単純な交換手術だけで済んだ。

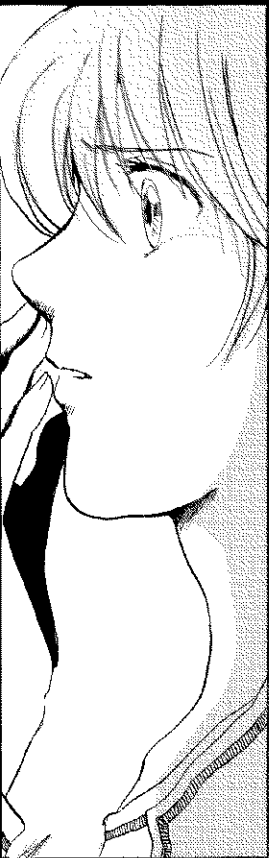
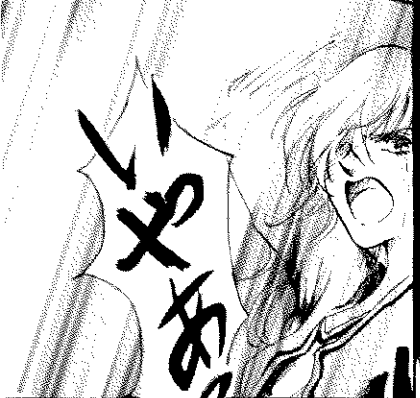
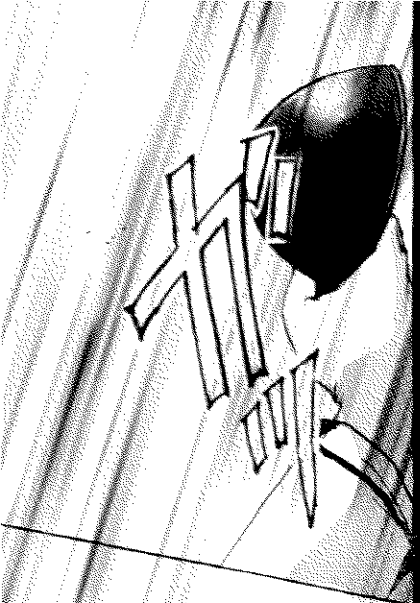
(もうこんな時間か……)

ジョーはのろのろと立ち上がった。

明日はドルフィンを整備、そして各メンバーのチェックを兼ねた簡易メンテナンスと、ミッションの後処理が目白押しだ。

忙しいのは有り難かった。





い...や...

これは... 私!?